

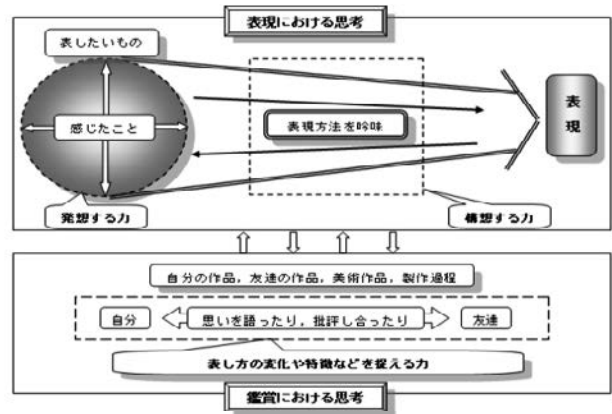
図画工作科

1 育成したい「思考力」

- a 感じたことを基に、多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりし（発想する）、表したいものを実現可能なものにするために、表現方法を吟味する（構想する）力
- b 感じたことを友達と話し合う等して、表し方の違いや変化、特徴等を捉える力

図画工作科の「表現」においては、「こんなものをつくりたいか」「どんなアイデアがあるか」という発想する力と、「表したいものを実現するためにはどのような方法が適しているか」という構想する力が思考の中心となる。

一方「鑑賞」においては、友達と交流しながら、形や色等について「友達の表し方とどこが違うのか」「表し方がどのように変わったのか」「なぜそのように感じるのか」等、表し方の違いや変化、特徴を捉える力が思考の中心となる。



(1) 感じたことを基に多様な観点でイメージを深める・アイデアを広げる（発想する力）

○ イメージを深める力

イメージを深める力とは、表したいイメージを具体的に思い描く力のことである。例えば、花の絵を描くとする。はじめは概念的で記号のような花（例：チューリップ→🌷）を思い浮かべる場合が多い。その際、その花がいつ、どんなところに咲く花なのかといった「時間的」「空間的」な観点をもつことで、花やその周りの様子がより具体的になる。そのことによって、だれもが思い描く一般的な花から、自分が表したい、感性豊かに思い描いた固有の花になるのである。以下にその実践例を紹介する。

第5学年「どんなカンジ？漢字アレンジ」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

選んだ漢字をアレンジするために、その漢字のもつイメージを深める力

本単元では、感情を表す漢字の中からアレンジしたい漢字を選んでデザイン文字をつくっていった。しかし、特に抽象的な漢字に対しては具体的なイメージをもちにくく、文字をどのように変えていけばよいのかが思いつきにくい。例えば「快」ならば、「気持ちいい」「すっきり」としか捉えることができず、形や色も曖昧にしか思い浮かばないのである。そのイメージを経験とつないで語らせることで、「朝起きたときの布団の中が気持ちいい。」「暖かい部屋で本を読むときです。」等の反応が出た。このように、「朝起きたとき」「本を読むとき」等の「時間」や、「布団の中」「暖かい部屋」等の「空間」の観点から具体的に「快」のイメージを思い描き、アレンジにつなげる手がかりを見つける力が、イメージを深める力である。

○ アイデアを広げる力

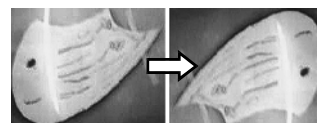
アイデアを広げる力とは、感性を働かせながら、描く対象を形や色等に関わる観点から見つめ直し、いろいろな表現の仕方を見いだす力である。例えば、無造作に紙をちぎる。すると、その紙の形が動物に見えることがある。さらに、紙を斜めに置いたり裏返したりした時、全く別のものに見える。上記の花の例では、「花びらの色を変えてみたら」「大きくしてみたら」「向きを変えてみたら」等の観点から花を見つめ直すことで、いろいろな花の表現の仕方を見いだしていくのである。以下にその実践例を紹介する。

第1学年「だんぼうるのかげらを かみのうえにおいてみると」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

選んだ1枚の段ボール片の形の見え方から感じたことを基に、多様な観点でアイデアを広げる力

手に取った段ボール片が何に見えるかイメージさせると、「お化け」と捉えた子どもがいた。その子は、そのイメージが強く、新たな表現へと結び付きにくかったのである。そのような子どもが、段ボール片を反対から見ることに気付き、「ねずみだ。とがった部分は鼻の先に見える。」と、形に対する新しい見方を見つけた。このように、新たな見方からいろいろな表現の仕方を見いだす力が、アイデアを広げる力である。



【方向を変えて「お化け」→「ねずみ」】

(2) 表したいものを実現可能なものにするために、表現方法を吟味する力（構想する力）

深め、広げた発想から、表現したいものを決め、表現方法を試しながら表したいものを実現可能なものにしていく力である。「〇〇の色より、□□の色を使った方がびったりするかもしれない」等と、表したいことと材料や場所等の特徴、構成の美しさや視覚的な効果等を照らし合わせながら表現方法を取捨選択していくことで、表したいものが実現可能なものとなるのである。以下にその実践例を紹介する。

第2学年「おなじかたちをくりかえして ステンシルはんがー」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

作例や友達の作品から感じたことを基に、表したい生き物の様子が表れるように、パスで付ける色や型紙の置き方を吟味する力

本単元では、透明シートを切り抜いたものを版とし、そのふちに塗ったパスをこすり出してステンシル版画をつくっていった。最初、ある子どもは、数匹のうさぎが元気よく走る様子を表そうとして、色は黒や灰色、向きはすべて同じにしていた。この子どもが、友達の作品を参考にして表し方を試していく中で、「赤や黄を使ったり、いろんな向きにして重ねた方が、元気よく走り回っている感じがする」と考えた。このように、色や置き方を試しながらイメージに近い表し方を見つける力が、表現方法を吟味する力である。

(3) 感じたことを友達と話し合う等して、表し方の違いや変化、特徴等を捉える力

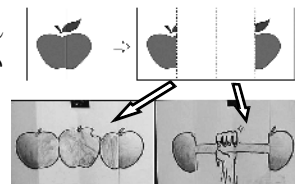
鑑賞において、子どもたちは、自分の作品を改めて見直したり、友達の作品や美術作品、制作過程を見たりして、さまざまな感じ方をする。それについてつぶやいたり友達と話し合ったりする際、「こっちの方がいいです。」だけではなく、形や色、材料、用具の使い方とつないで話し合わせることで、表し方の違いや変化、特徴を捉える力が育つと考える。そのためには、「〇〇な感じを表すために□□を使ったよ。」「この部分に△△色を使っているから、…な感じがよく表れているね。」「ここを大きくかいたのは、きっと…を表したかったからだ。」等、形や色等に関わることばを介しての話し合いが必要になる。以下にその実践例を紹介する。

第4学年「開くとあれあれ？おりたたみ絵本」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

友達と自分の表し方を比較して感じたことを基に、その違いや特徴を捉える力

本単元では、右図のように画用紙を開いたとき、りんごの間に現れる形を工夫していった。途中、鑑賞の時間を設け、数枚の作例について話し合わせた。すると、「左はりんごの数が増えているが、変化はあまりない。」「右のように、りんごではなく手をかいてダンベルに見えるようにした方が、驚きが大きい。」という反応が表出された。このように、話し合いを通して感じたことを具体的に形やその数等とつなぐ力が、違いや特徴を捉える力である。



【作例を比較】

2 思考活動を保障するために

○ 学習対象をいくつかの部分に分け、それらを子どもが選択できるようにする

第2学年「紙でつくろう！ ゆめのタワー」では、画用紙で作った角柱や円柱等を積み上げながら、より楽しいタワーにするための方法を見つけていった。本時の導入では、ビデオカメラで作例のタワーの一部をアップにすることで、部分を工夫するよさを捉えさせた。その後、制作途中のタワーを鑑賞する場を設けたが、工夫した部分をどのように説明すればよいか分からず、戸惑う子どもがいることが予想された。そこで、小さな人形を自分のタワーの頂上に近い部分や床に近い部分等に分けて立たせた。人形が立っている位置の辺りで見える形に絞って「そこでは何ができそうか」「その部分に実際立つことが出来たら、どんな気持ちになりそうか」と想像できるようにしたのである。これにより、人形を立たせた部分の中から、より自分が工夫したところが相手に伝わる部分を選んで説明することができた。そうすることで、友達の工夫しているところや自分の工夫しているところのよさが明確になり、それらを基に、さらに工夫すればよいところを考えていくことができた。



【人形をタワーに立たせて、よさを見つける】

○ 視覚等の感覚に働きかけることで、イメージを広げる

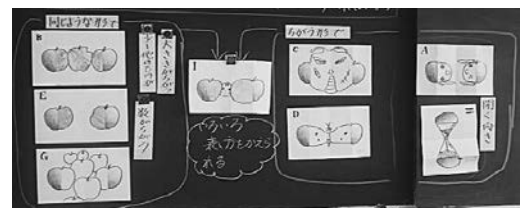
第1学年「コロコロ、パタパタ ころがるおもちゃ」では、より楽しい動きになるよう、筒の大きさや筒にさす竹ひごの位置によって絵の部分の動きがどのように変化するかを見つけていった。しかし、最初に選んだ筒や竹ひごの位置で満足し、それらを変えて試そうとしない子どもがいると予想された。そこで、転がったときの動き方を手で表現させるとともに、オノマトペで表させた。これにより、筒の大きさや竹ひごの位置関係を左右の手の回し方や位置で表すことができ、「(交互に手を小さく回転させながら) パタ、パタ」「(両手を大きく一緒に動かしながら) パターン、パターン」等、音声として絵の動き方を再現することができた。そして、子どもたちは「小さい筒にして、竹ひごを反対(向かい合わせの位置)に付けると散歩している様子が表せるよ。」「大きい筒にして、同じところに竹ひごを付けると仲良く元気にジャンプしている感じになるよ。」等、筒の大きさや竹ひごの位置と動きの感じとをつなげながら、転がるおもちゃのイメージを広げていった。



【動作とオノマトペで動きを表現】

○ 学習対象をまとめて配列するとともに、操作や表出等による作業化を図る

第4学年「開くとあれあれ? おりたたみ絵本」では、開く前に見える絵とのつながりを考えながら内側にかく絵を工夫していく。しかし、開く前の絵に固執したり、開く向きは横だけだと思っただけで、内側に表す絵のイメージが広がりにくいことがある。そこで、前時までの試しの作品の中で代表的なものを板書上に一斉に示し、開いた部分の見え方を基に、作品を仲間分けさせた。それにより、絵の表し方の共通点や違いが視覚的に捉えやすくなり、「りんごと同じものを描いても大きさや数が違うと感じが違う」「別のものを描こうとする場合でも、横だけでなく縦にも開いているものがある」と、いろいろな表し方に気付いていった。そして、かく絵のイメージを広げていくことにつながった。



【仲間分けにより表し方を見つける】

「過程の明確化」については、次頁以降の実践例で詳細を記載する。